

幼児の発達と

個人差

高橋さやか



個人差といふものは、何によってあらわれてくるのだろうか。個性といわれるものと、個人差とのかかわりあいは、どのようなものであろうか。

一人ひとりの子どもにおいて、発達のあり方がそれぞれちがうことは、いまさらあらためていうまでもない。集団保育が、かなり徹底した形で行なわれていても、個人差は、必ず見出されるはずである。

結論からさきに言えば、そしてやや大胆にいい切るならば、幼児の発達を考え、教育計画をたてる場合に、個人差にとらわれる必要はない、といえる。

個人差そのものがない、というのではない。むしろ反対に、どんなにしても、個人差は常に生じるものであるし、個体におけるファクターの複合の特殊性、という意味での「個性」は、抹殺できないものだからである。個人差とは、個性に由来する現象面のちがい、をいうものといってよいであろう。

外部的には、同一の条件下におかれても発達に個人差があらわれ、みとめられるのは、もちろん、内部的なもののあり方——外部的条件のうけ入れ態勢——による、ということはできるであろう。

個性を重視することと、個人差にとらわれることは、おのずからわけがちがう。

個体がそれぞれ個性をもつ以上、個人差が生ずるのは当然である

個性を重視するならば、発達にかかる個人差を、——差があるということを問題視してはならないはずである。

しかしながら、個別教育が、個人差にこだわる教育にしかすぎないならば、それは殆んど意味がない。

幼児期に個別教育が必要なのは、幼児期が自我の確立期であることをにおいて、一人ひとりの自我の確立を確認する意味で肯定される。

この個別教育は、実は、教育それ自身の方法、或いは計画において考えられるよりも、教育の評価における方法でなければならぬと考えられる。

幼児・幼年期の教育の目標を、器質形成と機能発達→独立整備→自我の確立→活動形態の分化と認識の発達、および自他間のコミュニケーションの成立→基本的人格形成（社会的自我の出発）……」
いうように捉えたいたいと考えるのであるが、この目標は、すべての子ども——人間にとつて、別個のものであるわけはない。

どんなに個性がちがつても、したがつてまた、あらわれた個人差があるにしても、子どもはそれぞれに、器質形成をなし、機能発達をとげなければならない。三才前後には、応自我を確立し、六才前後には、自他間のコミュニケーションの成立を獲得して、一人前の社会人となるべき基礎を確立しなければならない。

ただ、個々のあり方にちがいがあるのは、当然であり、ちがいがあるままに、応の水準にそれぞれが到達しなければならないのである。

幼児期の教育において、久しい間個別教育が尊重されてきた傾向があることは、ある意味では理になつてゐるようにも見られる。

四年前（一九五八年）わたくしは、「保育カリキュラムの盲点——

幼児各個の発達過程を如何にみるか」を、保育学会における研究発表（というよりも問題提起）でとりあげたのであるが、いま考えれば、これはカリキュラムの問題ではなくて、教育評価の問題でなければならなかつた——少なくともより多くのウェイトを、評価の側において考察すべき問題であったのだと思う。

もつとも、カリキュラムの立場から考えようとしたために、発達過程を問題にしたのであつたし、過程における現象としての個人差は、それなりに顧りみる必要がないわけではない。

ただ、現在のわたくしが大切に考えたいと思うのは、教育における評価の位置が、もつと新しくとりあげられなければならないのではないか、ということである。

評価の方法論が、もつとつこんだところで再認識される必要があるのではないか。

よい意味での個人主義——個性尊重論が、たとえよい、——つまりかなりに正当なとりあげ方において実践されていても、なおかつ、ともすれば感傷的な偏よりをもつ危険性があるのは、発達の普遍的な正常さという基本を度外視して、個人（純粹な他と断絶された個人は、実は架空の存在にしかすぎない）に密着しようとする誤ちにおち入りやすいからである。

この意味で、個別教育——形態上での個別教育は、もはや過去のものであるといわなければならない。

子どもは、一人ひとり教育されなければならないものであつて、必ずかかわりあい——コミュニケーションをもつことにおいて育つべきなのであり、いわゆる「自己中心」時代においてもなお、外界とのかかわりあいなしには育つことができないものなのである。

このようなことは、いつてしまえばあまりにも当然かもしれないけれども、わたくしたち——少なくともわたくし自身は、つい観念的な捉え方の中で形態的な個別教育が可能でもあり必要でもあるような錯覚をもつてゐたようだ——そういう考え方なり教育実践なりをしていた一面があつたことを告白しなければならないと思う。

個別教育はあり得ない、しなければならないのは、個別評価である。もつとも、評価もまた教育のうち、といつてしまえばそれはその通りであるけれども

結局、はつきりさせたいことは、個人差は、教育の結果において見られる——見るべきものではあっても、教育の動機にはならない……少なくとも、幼児期の、「発達」を期待する教育においては、ということである。

年令」との、段階」との、「発達」の水準——枠の中で、個人差は、たしかにあるけれどもその「差」は、水準——あるべき基本的な

な状態（個体の、そして同時に人間普遍の）に抵触するものではない

但し、ほんとうの水準——あるべき基本的な状態は、正當に（ある意味では大へんに幅の広いものとして）規定されなくてはならない

さまざまな個人差は、正當に規定された発達水準の中に、包括されるものなのである

幼児期の教育は、個人差を包括——許容——しつつ、一定の水準

をもつ発達を、達成してゆくことである

環境設定、対人関係、獲得されるべき諸々の認識、好みしい教材

……それらは、或る意味で、一律であつてよいものなのだ
一律なそれらと、如何にかかわるか、というところに個人差があ

らわれる

そして、そのかかわりあいのあり方を如何に評価するか、というとき、教育者側の教育対象における個性の認識は重要である

この重要さは、或いは今までよりも更に、層みとめられてよいと考えられる

はじめの方にのべたところにもどることになるが、個体を形成しているファクターの複合のあり方は、たしかに個体それぞれにおいてちがいがある。そこに、個体における特殊性——個性があり、發

達の現象面における個人差を生むことになる

個人差は、形態的にも、質的にもあらわれるであろう。

その個人差のもつ意味を評価するには、単純な曲線的な価値観ではおさえきれない

個性に即した方法、尺度が当然に要求される

今までの個人尊重の教育には、この評価にかかることと、教育目標——発達の規準に基づく——にかかること、教育主体（子どもを客体とした場合の）にかかることとのあいだに混同があつたといえるのではないだろうか

個性がある子どもを一律に評価してしまうことは、今日といえども決して許されるべきことはではない

それと、幼児の発達を、個々別々にあつかわなければならない、ということとは同じではない

幼児の発達は、社会人として、人間としてある一律の枠の中で扱われなければならないし、扱われてはじめて、生物にすぎなかつた個体は、「人間」になる

そして、人間らしい人間でありさえすればその人間が、あらゆる特質——個性をもつことは、その個性において、社会の発展になり得ることになるのであるし、その個性の価値をみとめて教育されることが望ましいにちがいないのである